

ESD 授業に基づいた「生活科」の教科指導の実践

——和歌山「ぶらくり丁」のまち探検——

Practice of “Life Environment Studies” Based on ESD : Exploring the Town of Burakuricho in Wakayama

中井 精一※¹

※¹ 和歌山信愛大学 わかやま子ども学総合研究センター特別研究会員

ESD（持続発展教育）は、今の学習指導要領の基盤となる理念である。生活科は、小学校での教育のはじまりの時期における各教科等の学習の中心的教科と位置づけられている。VUCA¹⁾の時代の中で、これからの生活科は、探究学習としての要素を取り入れて、ウェルビーイング²⁾な未来社会をめざすためにはどうあるべきか考える。そのために、地域をあげて今、活性化に力を入れている和歌山「ぶらくり丁」を対象教材として「まち探検」の教育実践を行っているところである。本稿では、「これからの生活科」の教科指導の展望について述べる。

キーワード： ESD 授業、生活科、ぶらくり丁、探究学習、ウェルビーイング

1 はじめに

小学校校長をしていた2009年に「ESDの考え方」に出会って以来、16年間、ESDを教育研究テーマにしてきた。その間、校長として学校経営の指針にESDの考え方を取り入れ、定年退職後は大学教員として教員養成課程などで、理科教育法や生活科教育法などにESDの考え方を取り入れた教育実践を続けているところである。

文部科学省(2017a)により、学習指導要領が全面改訂されてからは、特に、生活科がスタートカリキュラムとして学校教育における低学年教育の中心的教科と位置付けられている。中井(2018)は、「ESDと生活科」に関する研究論文や学会発表において、生活科がESDの考え方を学校教育で実践するための「はじまりのカリキュラム」を担っていることを提唱している。

2023年4月より、和歌山信愛大学で1年次の「生活」と2年次の「初等教科教育法(生活)」を担当することになった。そのために、和歌山らしい特色のある生活科としての

対象教材を考えていたとき、「ぶらくり丁」のことを知った。さらに和歌山信愛大学とぶらくり丁商店街との関係が深いことも知り、是非、教材として「ぶらくり丁」を取り上げたいと考え、「まち探検」の対象に「ぶらくり丁」を取り上げ、3年目となった。1年目、2年目の授業内容を改善、工夫してきた内容を詳しく報告する。

ESDの考え方に基づいたウェルビーイングな未来社会をめざす「生活科の教科指導」の実践を通して、これからの生活科はどうあるべきかを、本稿で述べる。

2 ESDを基盤としたウェルビーイングな未来社会をめざす「生活科」とは

2.1 ESDを基盤とした学習指導要領の改訂

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で、日本ユネスコ国内委員会(2008)では持続可能な発展のための教育(持続発展教育)と訳している。文部科学省(2017a)の学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」とあ

ることから、本稿ではESDを「持続可能な社会の創り手を育むための教育」とする。

学習指導要領の策定過程において発表された中央教育審議会答申(2016)には、「ESDは次期学習指導要領改訂の全体における理念である」と述べられている。答申に基づいた小・中・高等学校学習指導要領で全体の内容にかかわる前文及び総則において「持続可能な社会の創り手」の育成があり、各教科においてESDに関連する内容が盛り込まれている。国民へのメッセージとして新設された「前文」には、子ども像として「持続可能な社会の創り手」や「社会に開かれた教育課程」が明記されている。また、学習指導要領の総則には、「持続可能な社会の創り手」とともに「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」の用語が明記されている。

高松・中井(2019)は、「学習指導要領にある教育理念が未来志向型の教育を通して、持続可能な社会を創ることとすれば、学びの内容が『社会に開かれた教育課程』、学びの方法が『主体的・対話的な深い学び』、学びの統合が『カリキュラム・マネジメント』となる。」と述べている。この三つの教育理念とESDの理念との関係を図解したのが、次の図1である。

ESDは「持続可能性」をキーワードに教育のあり方を捉え直し、将来への希望ある社会、「持続可能な社会」を創り出そうとする教育活動、教育の考え方である。そのため、ESDは、人と人、人と社会、人と自然との「つながり」を意識して、社会の解決すべき課題と私たちの身近な暮らしとを結びつけ、新たな価値観や行動を生み出すことを目指している。すなわち、ESDは「つながり教育」といえる。

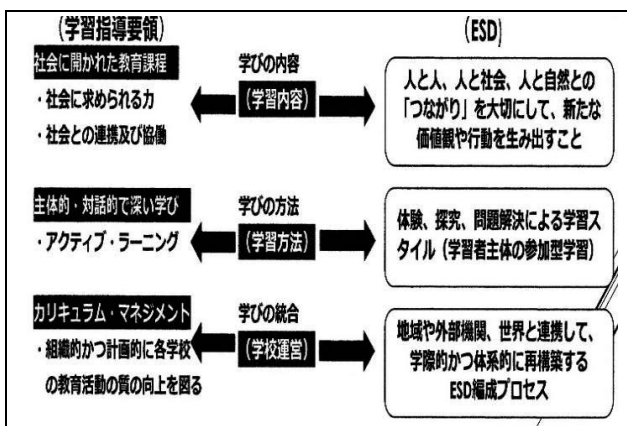


図1 学習指導要領の教育理念とESDの関係

2.2 学習指導要領における生活科

学習指導要領では、小学校教育のはじまりの時期において、生活科は、各教科等の学習の中心的役割を担っており、「スタートカリキュラム」の中心の教科として位置づけられ、さらには中学年以降を見通した身につけるべき資質・能力を育成するための教科としても位置づけられている。

田村(2017)は、生活科の学習指導要領の改訂について次のように述べている。「今回の改訂では、幼児期の教育の育成を目指す資質・能力で整理したこと、しかも幼児期の教育の出口のところ育成を目指す『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)』を明らかにしている。幼児期の教育と小学校の教育との『つながり』がはっきりしている。そして、小学校からさらに中学校につながる。その意味では、生活科は幼児期の教育とつなぎ、小学校において各教科等を横でつないで、そして、3年生以降の総合的な学習の時間や理科や社会にもつながっていくという、教育課程の重要な結節点としての役割を担っているといえる。」とある。(下線部は筆者による)

生活科を語るときには「つながり」のキーワードが頻出してくる。前項で、ESDは「つながり教育」であると述べたが、生活科も「つながり」による教科であることがわかる。さらに、生活科を終えた中学年以降と生活科のつながりについて、具体的に次のように確認できる。

総合的な学習の時間においては、生活科で学んだ自らの学びと共に学ぶという姿が発揮される。一方、自然現象を対象にした理科に、生活科の学びがどうつながるか。あるいは、社会現象を対象にした社会科においてどうつながっていくかということも、教員は意識しなければならない。その意味で、理科・社会の教科につながるものが、生活科の内容としてどのように学習指導要領に明示されているかを教員は自覚して、実践していかなければならない(中井2018)。

2.3 ESDと生活科

ESDと生活科の誕生と経緯に関する対比年表を表1のとおり、作成している。

表1 ESDと生活科の対比年表(中井 2018)

	ESD		生活科
	世界	日本	
1990			1989 学習指導要領(平成元年版)改訂 「生活科」の新設
2000	1992 国連環境開発会議(リオデジャネイロ)	2003 国連ESDの10年に関して提言	1993 全面实施
	2002 持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルク)	2005 国連第57回総会	1998 学習指導要領(平成10年版)改訂 「生きる力」の育成
	2005 国連ESDの10年国際実施計画	2006 ESD国内実施計画の策定	2008 学習指導要領(平成20年版)改訂 「生きる力」の育成 「知識・技能」の習得 「思考力・判断力・表現力」の育成
2010	2009 ESD世界会議(ボン)	2008 教育振興基本計画の策定、ESD国際フォーラム2008開催(国連大学)	2017 新学習指導要領(平成29年版) 総則前文の新設、「持続可能な社会」明記 社会に開かれた教育課程 主体的・対話的な深い学び カリキュラム・マネジメント
	2014 国連ESDの10年最終年合	2011 ESD国内実施計画の改訂	
2020	2015 持続可能な開発目標(SDGs)		

表2 ESDと生活科の共通点(中井 2018)

	ESD	生活科
目 標	①すべての人々が質の高い教育の恩恵を受けること ②持続可能な社会創りのために求められる原則、価値観及び行動があらゆる教育や学びの場に取り込まれること ③環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと	①具体的な活動や体験を通すこと ②身近な生活に関する見方・考え方を生かすという、人々、社会及び自然を自分との関わりによって捉え、自分の思いや願いに則して活動すること ③自立し生活を豊かにしていくということ
育成したい資質・能力	①持続可能な社会創りに関する価値観(人間の尊厳、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重) ②体系的な思考力 ③代替案の思考力(批判力) ④データ、情報の分析能力 ⑤コミュニケーション能力 ⑥リーダーシップの向上	(知識及び技能の基礎) 自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよき、それらの関わり等に気付くこと (思考力、判断力、表現力等の基礎) 身近な人々、社会及び自分との関わりで捉えるという方法 (学びに向かう力、人間性等) 自ら対象に働きかける意識の形成、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度
学び方・教え方	①関心の喚起ー理解の深化ー参加する態度や問題解決能力の育成を通じて具体的な行動を促すこと ②体験、体感を重視して、探究や実践を中心とした参加型アプローチ ③活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと	「アクティブ・ラーニング」 主体的・対話的で深い学びと位置づけ、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすること 「カリキュラム・マネジメント」 学校教育に関わる様々な取組を教育課程を中心に捉えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の向上につなげていくこと

1989年～2015年の25年間分だけであるが、ESDと生活科の誕生から現在までの歴史を表にまとめている。ESDと生活科は何らかのつながりがあり、同時に連動した動きになっていることが推察できる。

さらに、ESDの目標、育成を目指す資質・能力、学び方・教え方についてと文部科学省(2017b)の小学校学習指導要領解説「生活編」に記載されている、目標、育成を目指す資質・能力、学び方・教え方についての関係をまとめたのが表2である。

ESDと生活科が、歴史的にも内容的にも、極めて共通点が多いことは明らかである。

2.4 探究学習としての生活科

学習指導要領において、ESDの考え方が明記されていること、生活科とESDの関係についてはすでに述べた。今回の学習指導要領改訂で特筆すべきことは「探究」であり、資質・能力を育むために「探究の過程」が最重要視されていることである。

この背景には社会の変化がある。学習指導要領にあるように、社会はこれから大きく変化し、予測困難になってい

くこれからの教育の視点で、子どもたちが大切にしてほしいことは「持続可能な社会の創り手」であり、新たな価値観を生み出すことである。すでにわかっていることを習得することではなく、興味・関心に基づき、自ら学び、新たな知見を得る探究的な学びが求められている。

体験で得た「問い」を深め、「自ら考え」「新たな価値を創造する」プロセスへ移行する。これこそが、ESDの考え方を盛り込んだ学習過程であり、これを探究学習としてモデル化したのが、次の図2である（文部科学省、2017c）。

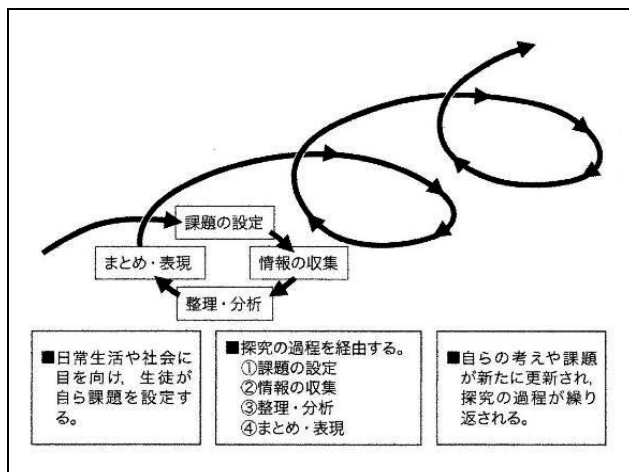


図2 探究的な学習における児童の学習の姿

探究的な学びには、教科の探究や総合的な学習の時間での探究があるが、それが学校の中で有機的に機能することが大切である。

探究学習と生活科は、自ら課題を見つけ、深く掘り下げて学ぶという点で共通し、小学校の生活科で培われる「身近な生活への関心や気付き」が中学年以降の総合的な学習（探究）の時間や教科の探究学習へと発展する、「連続性のある学び」である。生活科は教科として「生活圏」を探究する。探究学習はより広い範囲に、総合的な学習の時間や理科、社会科などで「興味・関心」を探究し、課題解決能力や思考力、創造力などを育成する、ESDの考え方に基づいた教育活動であることがわかる。

生活科の対象は学校、家庭、自然など児童の身近な生活圏全体であるが、探究活動の対象は興味・関心のある分野全般であり教科等横断的な内容である。生活科の活動は、直接的な体験や活動を通じて、多様な気付きを得て、自立の基礎を養うことであるが、探究活動は図2にあるように、課題設定、情報収集、分析、表現など、より高度な探究プ

ロセスを実践することである。内容としては、生活科は「学校と生活」「季節の変化と生活」「動植物の飼育・栽培」など、生活に根ざした具体的な内容であるのに対して、探究活動は知識の活用、問題解決能力、批判的思考力、創造性、コミュニケーション能力の育成などである。

生活科で「なぜだろう?」「もっと知りたい!」という気持ちが育ち、これが探究学習の「問いの種」になるのである。小学校3年生から始まる総合的な学習の時間（探究活動）は、生活科で培われた力を応用・発展させる場といえる。これからは、ICTを利活用することで、学校内外の多様な情報にアクセスし、探究活動を深く、充実させることができる。

このように、生活科で「生活への関心と体験」を育み、探究学習「自ら問いを立て、深く学ぶ力」へとつながる。社会に求められる力を育成していく教育課程の大きな流れとして、探究学習における生活科が位置づけられているのである。

2.5 ウェルビーイングと生活科

教育基本法に基づき、政府が策定する教育に関する総合計画「第4期教育振興基本計画」が、2023年6月16日に閣議決定された（文部科学省 2023）。基本方針・コンセプトは「持続可能な社会の創り手」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」である。これは、国の基本方針であり、各自治体は地域の実情に応じて適切な計画を策定することが求められている。

「持続可能な社会の創り手」については、すでに前項の「ESDと生活科」で述べているが、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が基本方針として位置づけられたことから、生活科との関係はどこにあるのかを考えてみよう。

鈴木（2024）は、日本の教育政策の今後の展開を次のように述べている。「不登校やいじめ、貧困など、コロナ禍や社会構造の変化を背景として子どもたちの抱える困難が多様化・複雑化する中で、子ども・若者に、つながりや達成などからもたらされる自己肯定感を基盤として、主体性や創造力を育み、持続可能な社会の創り手の育成を図る必要があります。地域における学びを通じて人々のつながりや関わりを創り出し、共感的・協調的な関係性に基づく地域

コミュニティの基盤を形成することも重要です。子どもたちのウェルビーイングを高めるためには、教師、家庭や地域、社会におけるウェルビーイングの向上も欠かせません。とある。(下線部は筆者による)

学習指導要領における生活科の目標、育成したい資質・能力などは、表2に明記した通りであり、ウェルビーイングの向上のためのコンセプトの内容に重なっていることは明らかである。まさに、生活科の授業を実践していくことが、学校教育でのウェルビーイングの向上のための、最初の学びの場であるといえる。

3 「ぶらくり丁」のまち探検の意義

3.1 「ぶらくり丁」とは

和歌山市立博物館(2009)によると、「ぶらくり丁」に関する内容が次のように記述されている。「文政13(1830)年、匠町で生じた火事によって、その付近の横丁筋が焼け野原になった。それまで人通りの少なかった本町より東の横丁筋での商売ができるようになった。呉服などを吊り下げて(和歌山弁で「ぶらくる」)販売したので『ぶらくり丁』と呼ばれるようになったという。以降、和歌山の中心的な商店街として人々に親しまれてきた。北ぶらくり丁、中ぶらくり丁、東ぶらくり丁を含めその範囲はかなり広い。」とある。その後、1970年ころまでは繁栄していたが、バブル崩壊などの時代の流れとともに、賑わいが薄れてきた。そのため、和歌山市、和歌山県、国が地域活性化のための様々な取り組みを始めて、現在に至っている。

3.2 生活科における「まち探検」

気付きの質を高め、自立への基礎づくりを教科の目標とする生活科は、自分と社会とのかかわり、自分と自然とのかかわり、自分と自分自身とのかかわりを軸に展開する点で全人的な学びであり、子どもを取り巻く環境を意識した教育である。文部科学省(2017b)による小学校学習指導要領解説には、生活科は九つの項目に属する内容からなり、「内容の階層性」として三層構造で内容間の関連が構築されている。下部層にある項目「児童の生活圏としての環境に関する内容」(学校生活、家庭と生活、地域と生活)の中

で「地域と生活」が主に「まち探検」で育む内容である。具体的には、内容項目「(3) 地域と生活」「(4) 公共物と公共施設の利用」「(5) 季節の変化と生活」「(8) 生活や出来事の伝え合い」が関わっている。さらに視点として「イ 身近な人々との接し方」「ウ 地域への愛着」「エ 公共の意識とマナー」「カ 情報と交流」「キ 身近な自然との触れ合い」が関連する。

生活科における「まち探検」は、子どもたちが自分たちの住む地域を直接体験し、身近な人々や場所との関わりを発見することで、地域への愛着と親しみを深め、安全に生活する力や主体性を育むことを目的とした活動である。探検を通じて地域の一員としての自覚を育むことができる。

「まち」は、生き物や水、光、土、風などの自然の要素だけでなく、人や人がつくった建物、道路、店舗、田畑、公園なども対象としているため、外界のほとんどが生活科の学習領域に入るといえる。しかし、「まち探検」で扱われる外界とは、小学校区内の生活環境がほとんどであり、子どもの徒歩によって巡ることができる範囲内に限られる。その点、子ども自身が直接体験できる場であり、日常に目にする場合が多い、身近な校区の街並みや街角の風景、自然などが対象になる。しかも、生活科が内容構成の基調としている四季の変化に合わせて、「まち」という領域への探検活動を促すことができる。

3.3 「ぶらくり丁」のまち探検の意義

「ぶらくり丁」を生活科の「まち探検」の教材として取り上げた理由について述べる。

和歌山信愛女学院(2022)には、次のような記述がある。「2019(平成31)年4月、和歌山信愛の持つ教育・研究・社会貢献上の蓄積を基盤とし、より高い資質を持った教育者・保育者の養成に対する社会的ニーズに応えたいという和歌山信愛の強い思いと、持続可能な和歌山を実現するために若者の地域定着を促進しようという和歌山市や和歌山県、日高川町、湯浅町などの自治体、学校関係者、地元企業、そして本町地区やぶらくり丁商店街など、多くの方々の思いが両輪となり、和歌山信愛大学が開学することとなった。」とある。(下線部は筆者による)

「ぶらくり丁」商店街の繁栄を取り戻し、新しい「まち」づくりのための活性化活動の中で、その地に設立された和

歌山信愛大学において、「ぶらくり丁」を地域教材として取り上げることの意義は大きい。

このことから、「ぶらくり丁」を対象として「まち探検」の単元を学ぶ、生活科の教材として取り上げることとした。

4 初等教科教育法（生活）の実践と 学生の変容

4.1 ESD 授業とは

大学での教員養成課程における実践を踏まえて「ESD 授業」について述べる。

ESD の考え方を実践していくためには、学校教育の現場で直接子どもとかわる教員自身の姿勢に影響を受けるところが大きい。教員が ESD の考え方をきちんと持っていれば、子どもたちに ESD の考え方が着実に伝わるはずである。そこで ESD の考え方を浸透させるには、まず、学校の教員から考えた。大学で教員をめざして学ぶ学生の多くは、いずれその地域社会で教職に就くことになる。彼らが授業で自ら ESD の考え方に基づいた授業実践し、さらに ESD を学校から地域社会に浸透させていくには、まず、大学の教員養成課程での「ESD 授業」が必要であると考え、実践しているところである。

「ESD 授業」の定義として、広義には、学校現場で教員が ESD の視点に立って授業を行うための理論と実践などを学ぶための授業のことで、本章では後述べる全 14 回分の授業のことである。また、狭義には、ESD の視点で授業を進め、ESD のことを学ぶ授業のこと。具体的には、毎回の授業をワークショップ、プレゼンテーション、振り返りなどをする「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業展開である。的確な「ESD 授業」を実践することによって、学習者の学びが深くなり、自己変容も促される。

この「ESD 授業」とは、ESD の知識や実践例などを学ぶだけでなく、学生自身が ESD を実践する授業である。実践することによって、学習者である学生自身が変容していく事例については、後に述べる。

4.2 授業計画（シラバス）

和歌山信愛大学では、前期に 1 年次対象の教科・保育内

容の専門領域「生活」、後期に 2 年次対象の教育・保育内容の指導法「初等教科教育法（生活）」を担当している。本稿では、初等教科教育法（生活）の実践について詳しく述べる。

シラバスの「授業の到達目標」と「授業の概要」は次のとおりである。

【授業の到達目標】①学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、新しい生活科の目標や内容について理解できる。②学習指導要領の内容を理解した上に、体験的な活動を取り入れ、生活科の学習指導案を作成することができる。③学習指導案に基づいて、模擬授業の計画を立てることができる。④模擬授業を行い、「主体的・対話的で深い学び」に基づいた生活科の授業の実践力を高めることができる。

【授業の概要】小学校生活では、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することが求められている。これらを踏まえて、幼児教育や他教科との連携、総合的な学習との関連を踏まえながら、社会や自然と関わる活動や自分自身の生活や成長に関することを学び、模擬授業などを通して主体的・対話的で深い学びを深めるための実践的な知識と技能を身につける。

授業の概要は、ESD の考え方に基づいた内容とした。生活科の目標を達成するためには、幼児教育や他教科との連携、総合的な学習との関連を踏まえながら、社会や自然と関わる活動や自分自身の生活や成長に関することを学ぶこと、そして、「主体的・対話的で深い学び」を深めるための実践的な知識と技能を身につけることが大切であるとした。

前述の広義の意味として「ESD 授業」は、次の 14 回分の「授業計画」を紹介して、説明する。

- ① 初等教科教育法（生活）で学んでほしいこと
- ② 学習指導要領における生活科の位置づけと ESD・SDGs
- ③ 生活科授業づくりのスタート
- ④ フィールドワークの実際 (学外授業)
- ⑤ 効果的な交流会にするために
- ⑥ 自然や身近にあるものを使った「あそび」(ものづくり)
- ⑦ 生活科と ESD・SDGs との関係
- ⑧ 動植物の飼育・栽培の実際 (ICT の活用)
- ⑨ 授業づくりと教師の役割

- ⑩ 教材研究と授業計画の作成
- ⑪ 学習指導案の作成から模擬授業へ
- ⑫ 模擬授業と授業検討会（1）模擬授業の準備
- ⑬ 模擬授業と授業検討会（2）模擬授業の実施
- ⑭ まとめ（論文作成）

第2回授業では、学習指導要領における生活科の位置づけとESDの関係について詳しく学ぶ。第7回授業では、生活科はESDと同様に「つながり教育」であることとESDの考え方に基づいた生活科の授業づくりの実践の基本を学ぶ。最後の第14回授業では論文作成を実施する。論文のテーマは「これからの生活科授業はどうあるべきか」とし、ESDの考え方で、教科等横断的な視点から子どもに育成すべき資質・能力につなげる生活科授業の方策について論じることを最終課題としている。

以上、ESDと生活科との「つながり」に注目して、生活科授業でどのように授業展開できるかを実践しているところである。狭義の「ESD授業」としては、前述したように毎回の授業展開をパターン化してリズムのある、効果的な授業を工夫しているところである。

特に、第3回、第4回、第5回授業の3回連続で、学外授業を含めた体験学習（フィールドワーク）を中心とした「まち探検」授業を実施している。

実践内容と学生の変容や成果物を次に紹介する。

4.3 初等教科教育法（生活）の授業実践

4.3.1 体験学習の表現としての作品づくりの意義

諸岡（2009）は生活科授業で、体験したことや気付いたことを「作品」にすることを意義について、次のように述べている。「フィールドワークは、自然に出会い、触れて、かかわる活動である。生活科の学習そのものということもできる内容である。その体験自体に価値がある。しかし、体験が体験に終わってはいけな。体験したり、具体的に活動して見つけたこと、気付いたこと、感じたことなどを絵や言葉に表す活動を通して、無自覚だった『気付き』を自覚できるようになったり、事実と事実の関係付けが意識できるようになったり、次にしたいことを意識できるよう

になる。そのために小型のフィールドワークノートを子どもに持たせ、子どもが『あっ、これは発見だ！』『すごいことをみつけた』と思ったら、ノートにメモしたり、絵や図を描いたりできるようにしたい。書きとめたノートやカードはそのままにせず、ひとまわりの単元などの活動の終了時などに、ひとつの『作品』に仕上げることを考える。相手意識をもって自らの活動を振り返り、気付きを深める、素敵な作品づくりの活動が終末の段階でも展開できる。フィールドワークのまとめの作品を子どもたちと協力してみんなで作り上げることこそ、素敵な活動である。」（下線部は筆者による）

本稿でも「ぶらくり丁マップ」を作品づくりとして、個人のマップ作成とグループによる大型マップ作成や発表会をした授業実践について、次に述べる。

4.3.2 「まち探検」の授業内容

第3回授業では、図3のワークシートを使って、「まち探検」の意義の導入を行った。生活科の授業づくりのスタートは、子どもの生活圏を知ることが重要である。そのために教員自身が地域を知るために「まち探検」に出かけることの意義について学んだ。そして、図4のように「まち探検」の計画書を作成した。

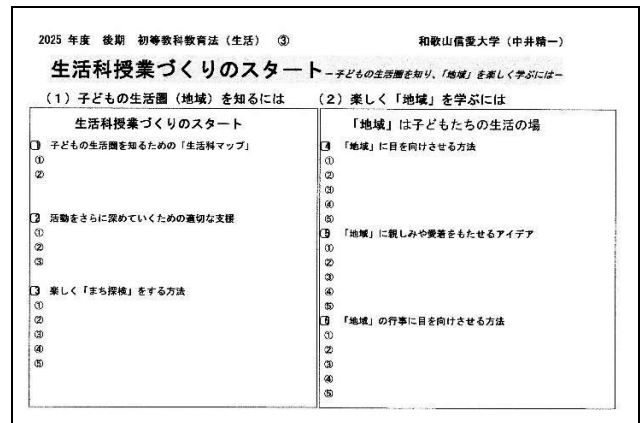


図3 第3回授業ワークシート「生活科授業づくりのスタート」

第4回授業では、グループで作成した計画書に基づいて、「ぶらくり丁」周辺に出向いて「学外授業」を実施した。図4にあるように、「わたしたちの町（和歌山信愛大学の周辺）マップ」の下書き用紙を各自のバインダーに挟んで、現地で調査内容なども記入できるように事前に準備した。

2025年度 後期 初等教科教育法「生活」 ③・④ 和歌山信愛大学(中井 穰一)

フィールドワークの実際－「まち探検」の計画づくり

(1) フィールドワークで大切なこと(6つ) (2) 「地域」を知るポイント(4つ)

① 目的 ② 場所 ③ 方法 ④ 誰と ⑤ 持ち物 ⑥ 「安全」	1. どんな人が生活しているか。 2. どんなお店があったか。 3. どんな施設があったか。 4. どんな自然があったか。
---	--

(3) 「まち探検」計画書

① 日時— 2025年10月30日(木) 曜日() () () () () ()
 ② 集合場所—授業教室
 ③ 目的場所と内容—
 ④ 班のメンバー【氏名】
 ⑤ 解散場所—授業教室

★第5回授業(11月6日)の授業で、班ごとに「生活科マップ」を模造紙で作成し、【発表会】をします。
 ◎ 次回授業(10月30日)【フィールドワーク本番】に必ず、持参すること。

2025年度 後期 初等教科教育法「生活」 ④ 和歌山信愛大学(中井 穰一)

組【 】 学籍番号【 】 班名【 班 】 氏名【 】

わたしたちの町(和歌山信愛大学の周辺)マップ

「まち探検」の感想など

★ 第5回授業(11月6日)の終了後に、提出してください。(評価対象の課題)

図4 第4回授業ワークシート「フィールドワークの実際(まち探検の計画づくり)」と「わたしたちのまちマップ」

2025年度 後期 初等教科教育法「生活」⑤ 和歌山信愛大学(中井 穰一)

効果的な交流会にするために—生活科マップの作成と発表会—

(1) 伝え合う活動を充実させるポイント (2) 生活科マップの作成【ワークショップ】

①伝え合う活動とは ○学習過程のどの場面で設定すればよいか ○「伝え合い活動」を取り入れるときの配慮事項 ①【準備段階】 ②【展開段階】 ③【振り返・振り返り】	①自分の班のテーマ ②探検場所 ③発見したこと ④良かったこと ⑤感想
---	---

(3) 効果的な交流会にするための「発表会」の実施(テーマ・感想)

1班「 」	4班「 」
2班「 」	5班「 」
3班「 」	6班「 」

図5 第5回授業ワークシート「効果的な交流会にするために」

第5回授業では、図5のワークシートを利用して、「まち探検」のフィールドワークの振り返りとして交流会(発表会)を実施した。その内容をグループごとに模造紙に、カラーペンなどを使い大型マップを完成し、グループ発表を実施した。各グループは、約3分間のプレゼンテーションをして、発表を行った。各自の「ぶらくり丁マップ」の作品は、発表会後に加筆修正をして、完成作品を次回の授業で提出とするように宿題とした。そうすることによって、完成度

の高い作品づくりができる。学生の「深い学び」を促すこともできた。

4.3.3 学生の変容と成果物(「ぶらくり丁マップ」)

本科目は、2年次、70名の学生が履修している必修科目であるが、代表的な成果物として、次の5名の学生の感想から授業前と授業後の変容について簡単な分析を行った。全文は、次の表3である。

表3 学生の変容(「まち探検」の感想)

学生①:まち探検の授業では、普段何気なく通っている地域にも多くの工夫や人々の努力があることに気付くことができた。商店や公共施設を見学する中で、地域の人々がそれぞれの役割を果たし、まちを支えていることを実感した。また、実際に質問したり観察したりすることで、自分の考えを深める力が付いたと感じた。今回の活動で、地域社会の関心が高まり、これからも自分の住むまちを大切にしたいと感じた。

学生②:まち探検をしてみて、大学の周辺には私が知らなかった「ひみつ」がたくさんあった。印象に残っているのは2つある。1つ目は、ぶらくり丁は今まで「シャッターが閉まっている」というイメージをもっていたが、いろいろなお店がさらさら新しいお店まであったことだ。2つ目は「始成小学校」が和歌山県で最初の小学校であり、その跡地に大学ができたことに誇りを感じた。初等教育発祥の地で学び、学びを発信していく教育者になりたいと一層強く感じた。これからも和歌山のひみつを発見し、子どもたちに伝えていけるようにしたい。

学生③:実際にまち探検に行ってみることで、まちの雰囲気が分かったり、地域の人と交流できたりしてとてもいい体験ができた。和歌山ブルース歌碑や諏訪園茶舗を調べてみると、和歌山やぶらくり丁の活性化のために歌碑を設置したり、ワークショップをしたりしていることが分かった。行くだけでなく詳しく調べることで、より地域の魅力がわかり、より地域への愛着が湧くと思った。そのため教育者になった時に、生活科の授業で「まち探検」を大切にしていきたい。

学生④:ぶらくり丁は、やはりシャッターが閉まっている店が多かった。しかし、レトロでお洒落な喫茶店や新しい今風のお店も結構見かけた。「ぶらくり丁=何もない」というイメージを今まで持っていたが、知らないだけでお店が意外とあることを感じた。地域活性、復興の活動として、もっと多くの人にお店

の存在を知ってもらうことが重要だと考える。

学生⑤：思っていたより人がいたし、店も開いていたし、何より新しい店が多かった！！「シャッター街、閑散としている」と言われていたので、行かなくてもそういうイメージがついていたんだと知れた。そういうイメージのせいで来ない人が多いので、これからはそれを払拭できればと思った。そのためにも、アーケードは良いのだが、もう少し照明が明るくなれば良いなと思った。

(下線部は筆者による)

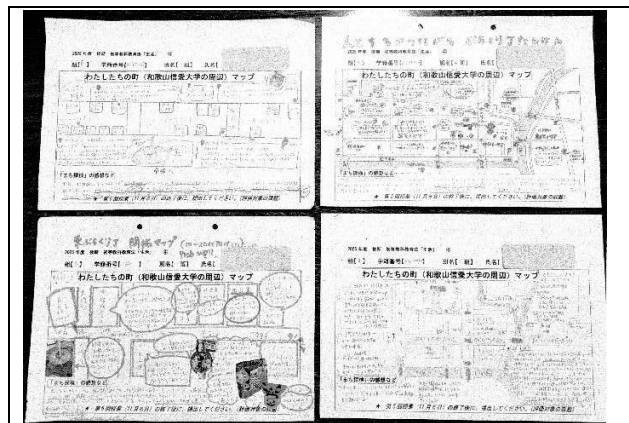


図6 学生の作品(「ぶらくり丁マップ」)

学生①は、まち探検を体験することによって、何気なく通っていた自分のまちの人々が、それぞれの役割をもってまちを支えていることに気付き、自分のまちをもっと大切にしたいと感じた。

学生②は、まち探検の中で自分なりの「ひみつ」を2つ発見した。今までになかった、自分が学ぶ大学(母校)への誇りを感じ、自分の将来への展望についても考えるようになった。

学生③は、まち探検に行くことによって、実際のまちの雰囲気を経験し、さらに詳しく調べることで、学びが深まり、より地域の魅力や愛着が増してきたことに気付いた。

学生④は、まち探検を通して、自分たちのできることで、地域貢献に携わる必要性に気付いている。

学生⑤は、実際にまち探検に行く実体験を通して、まちの活性化のための具体的な提言にまで言及している。

さらに、まち探検のような体験学習をした時には「作品づくり」が必要であることはすでに述べたとおりである。学生にもその意義について説明し、「ぶらくり丁マップ」の作成を全員対象の課題とした。学生の課題作品としての「ぶらくり丁マップ」は、フィールドワーク当日の下書きに基づいて完成させて、1週間後に提出する宿題にしたことから、どれもていねいに仕上げられている。

全て手描きで、工夫された解説も書き加えられており、そのまま「ぶらくり丁」商店街の活性化のための広報パンフレットにでも、すぐに採用されそうなものもある。その代表的な作品が図6の4点である。

今後は、本授業を通して地域貢献に携わる機会があれば、学生とともに関わっていきたい。

4.4 「幸せのループリーフ」の活用

ウェルビーイングな未来をめざす生活科指導を推進するための具体的な方法を最後に提起する。

前野ら(2022)は、図7の「しあわせ応援シート」を考案し、次のように使用の方法を説明している。「『しあわせ応援シート』と名付けたもので、まず、この四葉のクローバーの葉の中に、幸せの四つの因子、『夢や目標(やってみよう因子)』、『感謝している(ありがとう因子)』、『何とかなると頑張っていること(なんとかなる因子)』、『自分らしく個性を生かしてやっていること(ありのまま因子)』をそれぞれに書き込む。書き込んだあと、班のなかや友達にシートを回してカラフルなペンでメッセージを加え、応援合います。」とある。

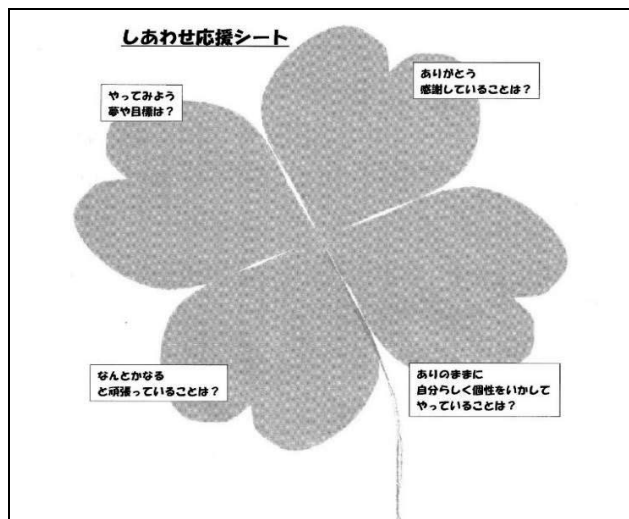


図7 しあわせ応援シート(幸せのループリーフ)

この「しあわせ応援シート」を参考にし、生活科の授業

の中やイベントにおいて、「幸せのループリーフ」と名付けたワークシートを用意して活動の振り返りなどに活用していきたい。

活動に関わる全ての人々が「やってみよう」という主体性や自己決定の推進、「ありがとう」と思う豊かな人間関係の構築、「なんとかなる」とチャレンジするマインドの醸成、「ありのままに」個性を高めていく自分らしさの開発といった、人間らしさの向上や心の成熟をめざす。

「幸せのループリーフ」を活用して、活動に参加した人々が「幸せとは何か」に気付くための体験となればと考えている。

5 おわりに

「これからの生活科」の教科指導を実践していくためには、ESD の考え方を基盤として探究学習の要素を盛り込み、教員も子どもも、お互いにウェルビーイングな未来社会をめざすことが、不可欠であることがわかった。

今回、教材として取り上げた和歌山「ぶらくり丁」活性化の取り組みにも、「これからの生活科」の実践の場として和歌山信愛大学の学生たちと大に関わっていきたい。

註

- 1) VUCA とは、Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) の頭文字をとった造語で、社会などの先行きが不透明で、将来を予測することが非常に困難なことをいう。VUCA 時代は、現代社会の予測不可能な状況を象徴する言葉として広く使われている。
- 2) ウェルビーイングとは、一般的には、身体的・精神的・社会的に満たされ、幸福感や生きがいを感じる良好な状態にあることを指し、単なる病気でない状態を超え、人生の質そのものを高める概念である。世界保健機構 (WHO) 憲章で提唱され、SDGs の目標にも含まれており、近年は、国や企業、教育現場でも重視されている。

参考文献・引用文献

文部科学省 (2017a) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年

告示)』東洋館出版

中井精一 (2018) 「学校教育における『ESD』の視点からの生活科の実践 (1)」『大阪成蹊大学紀要』第 4 号 pp.287-295

日本ユネスコ国内委員会 (2008) 『ユネスコスクールと持続可能な開発のための教育 (ESD)』文部科学省中央教育審議会答申 (2016) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm (最終閲覧日: 2026 年 1 月 3 日)

高松みどり・中井精一 (2019) 「ESD の実践とこれからの教育、ESD の展望 (1) 大学教育 (高等教育) での ESD のあり方」『大阪教育大学紀要』人文社会科学・自然科学第 67 巻 pp.149-16

田村学 (2017) 「新しい生活科が目指すもの」『平成 29 年版小学校学習指導要領ポイント総整理 生活 (久野弘章編著)』東洋館出版社 pp.4-5

文部科学省 (2017b) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 生活編』東洋館出版

文部科学省 (2017c) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版

文部科学省 (2023) 『第 4 期教育振興基本計画 (令和 5 年 6 月 16 日閣議決定)』文部科学省総合教育政策局政策課 (リーフレット)

鈴木寛 (2024) 「ウェルビーイングの向上と学校教育」『最新教育動向 2025』明治図書出版 pp.14-17

和歌山市立博物館 (2009) 『写真にみるあこのころの和歌山ー本町編ー』和歌山市教育委員会

和歌山信愛女学院 (2022) 『和歌山信愛 75 年史』学校法人和歌山信愛女学院

諸岡浩 (2009) 『小学校生活科教授用資料 生活科の楽しいフィールドワーク』大日本図書

前野隆司・前野マドカ (2022) 『ウェルビーイング』日経文庫